

宮本百合子集

昭和二十八年二月二十一日 初版印刷
昭和二十八年二月二十五日 初版發行

昭和文學全集8
宮本百合子集

著者 宮本百合子

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作

東京都品川區大井寺下町

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クローヌ 日本クローヌ工業株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 和田製本所

宮本百合子集

昭和文學全集
角川書店版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

卷頭寫眞
筆蹟

仲子

播州平野

風知草

二つの庭

解説
年譜

宮本顯治

三九
三六
三五
二五
七

1. 關於... 2. 關於... 3. 關於... 4. 關於... 5. 關於... 6. 關於... 7. 關於... 8. 關於... 9. 關於... 10. 關於... 11. 關於... 12. 關於... 13. 關於... 14. 關於... 15. 關於... 16. 關於... 17. 關於... 18. 關於... 19. 關於... 20. 關於... 21. 關於... 22. 關於... 23. 關於... 24. 關於... 25. 關於... 26. 關於... 27. 關於... 28. 關於... 29. 關於... 30. 關於... 31. 關於... 32. 關於... 33. 關於... 34. 關於... 35. 關於... 36. 關於... 37. 關於... 38. 關於... 39. 關於... 40. 關於... 41. 關於... 42. 關於... 43. 關於... 44. 關於... 45. 關於... 46. 關於... 47. 關於... 48. 關於... 49. 關於... 50. 關於... 51. 關於... 52. 關於... 53. 關於... 54. 關於... 55. 關於... 56. 關於... 57. 關於... 58. 關於... 59. 關於... 60. 關於... 61. 關於... 62. 關於... 63. 關於... 64. 關於... 65. 關於... 66. 關於... 67. 關於... 68. 關於... 69. 關於... 70. 關於... 71. 關於... 72. 關於... 73. 關於... 74. 關於... 75. 關於... 76. 關於... 77. 關於... 78. 關於... 79. 關於... 80. 關於... 81. 關於... 82. 關於... 83. 關於... 84. 關於... 85. 關於... 86. 關於... 87. 關於... 88. 關於... 89. 關於... 90. 關於... 91. 關於... 92. 關於... 93. 關於... 94. 關於... 95. 關於... 96. 關於... 97. 關於... 98. 關於... 99. 關於... 100. 關於...

うらいかな春は

きびしい冬の

可愛い路のとりは みとくつまり

和相の下で用意さ小

た

百合子

伸子

伸子は両手を後にまはし、半分明け放した窓枠によりかゝりながら室内の光景を眺めてゐた。

部屋の中央に長方形の大テーブルがあつた。シャンデリアの明りが、そのテーブルの上に散らかつてゐる書類——タイプライター、紫インタがぼやけた亂暴な厚い綴込、隅を止めたピンがキラキラ光る何かの覺え書——の雜然とした堆積と、それらを挟んで相對し熱心に讀み合せをしてゐる二人の男とをくつきり照して、風色の絨氈の上へ落ちてゐる。部屋ちゆうを輝かす灯が單調であるとは、二人の男の仕事も單調でつまらなかつた。ホームスパンの服を着た、淺黒い瘡せた男が左手に綴込を持ち、眼をくばり、頁をめくり、どんどん桁の多い數字を讀みあげて行く。向ひ合つて、伸子の父の佐々が椅子に淺くかけ、青鉛筆を持つて油斷なく數字をチエントクしてゐた。彼は品のよい締の變り襟のつ

いたスモーキング・ジャケットを着けてゐた。くつろいだなりにしも似合はず、彼はもう三十分以上その忙しい、機械的な仕事に没頭してゐるのであつた。

傍觀してゐる伸子には、仕事の内容も、今それをしなければならぬ必要も解つてゐなかつた。彼女がおとなしく窓際にしりぞいて眺めてゐるのは、主として、子供のうちから父の多忙な時決して邪魔はできないものと觀念してゐる習慣によるのであつた。けれど、彼女はだんだん彼らの活動の調子につりこまれて行つた。強くも弱くもならない平らかな聲が早口に、

「二八七〇ママ二六〇。五九三〇三〇ママ四二七……」

勤勉な紡錘の唸りのやうだ。それにつれ、佐々の青鉛筆はほとんど自動機的敏活さできつきつきと、細かく几帳面に運動する。そこに自ら獨特のリズムが生じた。ちつと見守つてゐると、機械の規則正しい運轉が人の心に與へる、力強い確乎とした、同時に精力的な充實に似たものを感じるのであつた。

彼らは一息にふた綴大判の綴込をかたづけた。そして少しののちと、三つめの薄い覺え書を讀み合せてしまふと佐々は、いかにも重荷の下りた風で、

「やあ、どうも御苦勞様でした」

と、頭を下げ椅子をすらした。伸あたりには、一時に緊張の緩みが來た。伸

子まで何となくほつとし、俄かに外界の騒音が自分の背後から幅廣く押しよせてくるのを感じた。丁度晚餐後、人の出さかる最中だ。彼女らのある五階の眞下に横たはるプロワード

ウエイからは、絶間なく流れる無数の人間の蹀音、喋り聲、笑ひ聲などが溶け合ひ混り合ひ、とりとめのない雜音の濃い瓦斯體となつてのぼつて來た。夜の空まで瀾漫する都會の巨大などよめきを貰いて、キロロロロ……と自動車警笛が聞えた。燈柱の下で夕刊を呼び賣する子供の「パイバア、パイバア」と云ふ甲高い聲がとぎれとぎれ聞えて來る。——ホームスパンの男は、手早く書類をまとめて、自分の黄色い手提げ鞆にしまつた。そして、二言三言佐々と話し、伸子に遠くから挨拶すると、遽しく氣取つて出て行つた。佐は戸口までその男を見送つた。

戻つて來ると、彼はうまさうに葉卷の煙を吹いた。

「さて——そろそろ出かけますかな」

伸子は窓際を離れ、傍の長椅子に來てかけながら、訊いた。

「ほんとにいらつしやるつもり？」

「どうして？ お前も行くんだらう？ さう返事をしてありますよ」

「私——やめたいわ」

「なぜ？」

「くたびれてゐるの。——それに……あまり面白くもなさきうぢやないの」

「ふむ……」

佐々は、暫く黙つて自分の吐く煙を眺めてゐたが、やがて徐ろくに云つた。

「着物なんぞはそのままで結構なんだからおいで。——行けば何かしら行つただけのことはあるものだ。それに儼のあるうちでできるだけ人も知つて置かないと、いざといふ時一人で困るよ」

今夜、彼女は父と二人、日本人の學生俱樂部に催されるある集り、茶話會のやうなものに招かれてゐた。最近故國から來た某文學博士を中心として打ちとけた集りをするといふ案内を貰つてゐたのだが、伸子は一向好奇心が起らなかつた。彼女自身も紐育には新來の旅客であつた、彼女は、午後獨りで勝手の不確かな下街に買物に出かけ、神經を疲らせて歸つた。夜まで行儀を守つて人なかにゐなければならぬのは、彼女に少しうんざりなのであつた。けれども健康で活氣がある佐々は、伸子の引つ込み思案を多くの場合うけつてなかつた。彼は、六十歳に近い老人と思はれない活潑さで、いつも伸子を引き廻した。それには、自分が滯留してゐるうちに、地理も覚えさせ、交友もこしらへて置いてやらうといふ心遣ひが潜んでゐるのは明かであつた。彼は會社の用事で、僅か三箇月ばかり、この都市に來た。彼が歸つてしまへば伸子は獨りであるのころ豫定であつた。彼女は旅行の間、大抵いやでも父が行く處へはついて歩い

た。市役所から、ある大銀行の金網の裡で、人間が金貨の山に埋まり血の氣のない指で金勘定をしてゐる、空氣の流通のわるい暑い部屋の中まで。土地不案内な、これといふ定つた目的ももない伸子は、また、さうでもしなければ一日が永く、捨てられた石のやうに退屈したに違ひない。——

今も彼女は確かに行きたくはなかつた。けれども、父が出たあと、ぼつくり獨りでホテルの部屋に十二時頃まで閉ぢ籠ることを考へると、それはあまりぞつとした役廻りとも思へない。

伸子が足をふりふり愚圖愚圖してゐる間に、佐々はそれにかまはず活動家らしい足どりで寢室に行つた。間もなく、開け放した扉から、水のばしやばしやいふ音、髪ブラシを置く軽い乾いた音などが響いて來た。窓からは、宵つばりな都會の眠氣知らずなざわめきと、向ひ側の建物の屋根の頂に廻つてゐる廣告イルミネーションの氣ぜはしい明滅。下界の燈火を反射して、ぼうつと濁ひを帯びた黒い夜空の一部が見える。

伸子の胸にいきなり、

「おいてきばりにされては大變だ！」と云ふ、子供らしい切ない思ひがこみ上げてきた。

彼女は、いそいで椅子を立ち、父の後を追つた。佐々はもう髪の手入れもすみ、部屋の眞中に立つて上着に片手を通しかけてゐると

ころであつた。それを見ると彼女は慌てて云つた。

「すまないけれど一寸待つて下さらない？ 私、やはり行くわ」

伸子は足早に鏡の前に行つた。

佐々は、時計をみた。

「もうあまりゆつくりはできないよ」

「すぐよ、五分！」

伸子は、迅速に髪をなほし、小さなまるい茶色の帽子をかぶつた。

二

丁目がふえるにつれ、人通りが減り、街がさびれてきた。

父娘は、陰氣にブライインドのおりた大きな飾窓について角を左へ曲つた。表通りから入ると俄かに暗く、緩く爪先下りになつた舗道の足許さへよくは見えないやうであつた。行手の大通り一つ隔つた彼方がハドソン河で、時々鋭い夜の河風が吹きぬけた。リヴァーサイド・パークの葉のない樹木の間に冷たい蒼白さで瓦斯燈がぼんやり灯つてゐるのが見える。

伸子は、寒さと淋しいところへ紛れこんだ氣味悪さとで異様な緊張を感じた。彼女は、我知らず強く父親の腕にすがりついた。「——まるで暗いのね。——見當がおつきになつて？」

佐々は、靴の踵の音をさせて歩きながら、

絶えず右側の家並に注意を拂ひ、幾分平生と違ふ厭へつけた音聲で答へた。

「もう少し先だらう。——然し、かうどれもこれも同じ形の家ばかりではあるな。もつと街燈でもふやせばいいのに……」

全く、左右には低い鐵柵と三四段の上り口を持つた狭い家の入口が、どれもこれも同じ型で幾十となく並んでゐた。鋪道のまばらな街燈の光は、一寸奥へ引つ込んだそれらの質素な戸口まで届かない。彼らは、だんだん佻しく感じながら、ほとんど一軒ごとに薄暗い家の入口を覗いて進んだ。大抵いやになつた時分、彼らの前に一つ明るく灯かけの洩れる弓形窓が現れた。カーテンの隙から、内部にちらつく男の立姿や文句の判らない話聲が聞えて来る。

伸子は、父の腕を引いた。

「ここよ！」

「佐々は、外廻りを一通り眺め、入口の段を昇つた。呼鈴を押した。短い、餘韻のない音が直ぐ、扉の彼方で鳴つた。伸子は期待と好奇心を感じた。暗い横通りで變な不安に襲はれて来たところなので、彼女にはこの古くさい板硝子のはまつた扉の一重彼方が何かの暖かき楽しさを持つてゐさうに思はれたのであつた。すぐ硝子に人影がさした。櫻扉は内側に案内滑らかに開いた。扉をあけた男は、彼らを見ると更に入口を廣くあげ、改つた口調で挨拶した。

「よくいらつしやつて下さいました。——どうぞ……」

「佐々は玄關の間に入るとすぐ外套を脱ぎはじめた。伸子は自分の周囲を見廻した。右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があつた。左側には、葡萄菓の厚肉浮彫のあるベンチが置かれ、その前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。奥に重いカーテンで人目を遮つた開け放しの室があつた。その廣間から男聲ばかりの、壓力が籠つた談笑が響いて来た。その邊一帶頑丈な茶色の檜の圓柱や鏡板がつやつやと灯の下で光つてゐるのが、伸子に快適な感銘を興へた。彼女の感覺に新鮮な一種の匂ひがその邊に滲みついてゐた。家具の艶出液のほひ、煙草、羊毛ともう一つ何か乾いた皮製のものから立つやうなほひが皆一つに溶けこんだ、男ばかりの住居らしい匂ひだ。

佐々の外套をたすけてぬがすと、扉をあけた男が云つた。

「——ではこちらへ、女の方も澤山来てをられますから……」

伸子は軽く頭を下げる拍子にはじめてその男の顔をはつきり見た。彼は白い低いカラアと黒いネクタイと黒い地味な少し手ずれた服を着てゐた。陰氣な顔だが、圓みのある大きい顔が目についた。伸子は、階段を登りながら、

「安川さん、来ていらつしやいますか」と訊いた。

三五六に見えるその男は、持ち前と見える低い調子で答へた。

「来てをられます」

二階へ登り切ると、一つの部屋の戸が半分開いてゐて中から女の喋り聲がした。彼は、

「安川さん」と聲をかけた。

「佐々さんが見えました」

中の話聲がびたりとしづまつた。

「まあ！ さうですか」

聲とともにやや前躍みに大股で、闕の上に安川の姿が現れた。伸子を案内した男は階下へ去つた。安川冬子は、伸子がある専門學校に僅の間籍を置いてゐた時、上級の學生であつた。彼女は勤勉な學業の優れた生徒として誰にでも知られてゐた。伸子は、一二度口を利いたくらゐの間であつたが、ここでとにかく海の彼方からの友達と云へるは彼女大きりであつた。安川は、一年ばかり前からC大學で教育心理學を専攻してゐるのであつた。

安川は、珍しさうにじろじろ伸子を見た。

「噂はきいてゐたけれど、私は一向外へ出ないから、ちつとも知らなかつたわ。よくいらつてね。——いつこちらへ着いて？」

「三週間ばかり前」

安川は、學校時代とちつとも變らない、その變らなさに伸子が驚いたほど同じときばきした口調で訊いた。

「お父様と御一緒だつて？」

「ええ。腰印着」

伸子は、自分がこの女性達の前でまるで年少者扱ひなのを感じた。

「今夜も下に來てゐるわ」

「さう。——いいわね。今どこ？ お宿は」

「ブレントホテル」

「ああ、私あすこならいつだつたか行つたことがありますよ。——皆さんにご紹介しませうね、こちらは高崎さん——高節をおでになつて家政學をやつていらつしやる。この方は名取さん——音楽がご専門——」

伸子は、一人一人に向つて克明に頭を下げた。

一通りの挨拶、短い應答が終ると、伸子は失望といふか、意外きといふか、ぼんやりとした心持を感じた。居合せる人の中には一目で何處か好きになれるといふやうな人が一人もあなかつた。彼女らは、それぞれ専門もちがひ容貌も違つてはゐるのだが、誰でもがしつかりものらしいところ、物質にも精神にも多忙で絶えず何かに追ひ立てられてゐるといふ餘裕のない感じ。それらは、うるほひない身なりとともに、例外的に持前であつた。伸子は、傍の椅子の上に外套を脱いだ。

一旦途切れてゐた學校の話、留學生の噂が聞もなく甦つた。ある人は、伸子に親切に話しかけた。彼女は愛想よくそれぞれ答へた。然し、心が變に沈鬱になつた。伸子は、この部屋をこめてゐる生活の狭い、暢々しな

い雰圍氣が何となく窮屈で馴染めなかつた。折角新しい自然や人間の生活の中に入つてきてゐるながら、何も見ず聞かず、友達とよつても興味、課題、いそがしき、又は、第三者にも興味の起しやうもない噂しでできない海外遊學生の境遇に、伸子は恐怖を感じた。

縛りつけられた感じは、階下の廣間に出ても伸子から去らなかつた。

廣間の隅では左々が機嫌よく安樂椅子に納まり、しきりに何か喋つてゐる。

入口に近いカーテンの傍の柱によりかかり、腕を組み、半刺彼女を二階まで案内した男が、もう一人の椅子にかけた男と語つてゐた。椅子にかけてゐる男の膝には、場所柄になく白と黒との斑猫が一匹丸くなつて抱かれてゐた。この男は打ち寛いだ風で、その猫の背を撫で物云つてゐる。家庭的な光景で、彼女はいい心持がした。伸子は、隣りに坐つてゐる中西といふ、おそく來た、美しい、情の籠つた鬘で物を云ふひとに、その男の名を訊かうとした。

すると、先刻の男が大柄な骨つばい體をぎごちなく運んできて彼女の前にあるテーブルの横に立つた。彼は、テーブルの端で埃でも拂ふやうな手付をすると、低い聲で、

「今晚は——」

と開會の辭めいた挨拶をしまじめた。圍りの幾つかの顔が聲の方へ振り向いた。廣間ちゆうのざわめきがしづまつた。森とした寄木の

床の上で誰かが椅子をずらせた。——改つた咳拂ひの聲がする。……

男は、伏目になつたまま、平凡に多數の人人の集つたことに對する満足の意をのべ、松田博士の對博士の言葉と紹介とを終つて席についた。松田博士は懇篤きうな中老人であつた。彼は自席に立つて、座談的に藝術の郷土的特質といふ見地から亞米利加の繪畫についての觀察を話した。

話しては、やや腹がれた平坦な音聲で、常識的に話を進めて行く。伸子の興味は、又程なくそれに物足りなさを覺えてきた。彼女は、話をききながら、向ひ側に並んでゐる男達の顔を見較べはじめた。大體の男は廣間の右側に立つてゐる博士の方に頭を振つてゐるので、伸子のところからは澤山の顔の左半面だけが見えた。艶々した血色の上陸の腹れぼつたい凡俗な顔、皮膚が黒ずんで目鼻立の粗い、恐らくは口中が臭きうな容貌、又は、頬から口の邊にかけて肉の薄い、粘液質らしいすべすべした皮膚の持ち主。——ちよつとした脚の置き方や椅子のもたれ方がみな何處か隠れた性格の一部を現してゐるやうで、伸子はこの見ものを面白く感じた。正面から視た時は、恰好さうに引緊つてゐたある青年の顔が側面から見るとまるで魯鈍きを暴露し力弱く見えた。——伸子はふと平生あまり見たことのない自分の槽顔について微かな不安を感じた。順々にわたつて、彼女と斜向ひになつ

てあるさつきの男、名も仕事も知らない中年の男の番が来た。

彼は椅子の奥に深く腰を落してもたれ、癖と見えてしつかり胸のところは腕組みをして、うつむき加減になつてゐる。先方から見られる心配ない一瞥を與へながら、伸子は微かな戸惑ひを心の隅に感じた。彼の横顔には、これまで見てきたどの男達にもない何かがあつた。ほかのどの男でも、容貌と軀とは同じ力の密度——つまり胸のところにあると同じ血や肉でひとつくるみにできてゐると感じられるのに、この男ばかりは肩幅のひろい北國人風な體つきと、その上につてゐる顔との間に、妙にちぐはぐなものがあつた。足許から同じ力を入れてずつと見上げていくと顔へ来て急に視線が間諜かんていつくやうな複雑なもの——地味さ、感傷的なもの、心持がのびやかに外部に發しきらず内攻してゐるといふ印象を與へるものなどが、陰翳いんえいとなつて、下唇の引緊つた蒼白い横顔にはびこつてゐるのであつた。

伸子の視線は一二度後戻りをした。彼女の好奇心が、その陰氣な横顔にむかつて動いた。彼の顔にあるものは、決して多くの人々の持つてゐるやうな得意な男の快活さでもなければ、雄々しきでもなかつた。何か陰のものであつた。それは暗さに近い。視るたびに、その陰翳は何處から來る何物なのかをひどく知りたいたい心持を起させる種類のものなのだ。

松田博士の話は終つた。

あたりには以前より打ちとけた談話が起つた。廊下の方の扉が開き、アイスクリームや砂糖菓子が進びこまれた。すると、伸子が好奇心を持った男が再び立つた。そして新しい顔ぶれもあるから、順ぐりに自己紹介をしたらと思ふがと提議した。さういふことの大膽な伸子は、思はず救ひを求めらるやうに遠方の父親を見た。父はその申し出がさも愉快さうに、愛嬌あいせうのよい微笑を眼尻の鬚ひげにたたんで晴れ晴れと坐つてゐる。

「それでは——請ふ随まづより始めよといふことがございますから、失禮して私から申し上げます」

彼は、佃いづた一郎といふ姓名であつた。C大學で比較言語學を専攻し、古代の印度、イラニアン語をやつてゐるのださうだ。國は裏日本で、研究の傍かたはら、Y・M・C・Aの仕事を手傳つてゐた。彼は、「私でできますことはできるだけ御相談にあづかりますから、どうぞ御遠慮なくおつしやつて下さい」と結んだ。

古代語の研究と、極めて實利的なY・M・C・Aの仕事との間に、どんな心持の上の必然なつながりがあるのだらう。伸子は腑はらに落ちない氣がした。が、彼の専門の題目は漢然とした満足を彼女に與へた。彼の顔に現れてゐるものとその研究との間に性格的な關係をもつ何ものかを感じたやうに思つたのであつた。

た。

後から立つた者は、ほとんど皆、政治、經濟、社會學、法律等が専攻であつた。猫を抱いてゐたのは、澤田といふ植物學を勉強してゐる人であつた。女達も、各、抱負や目的を手短かに述べた。伸子は極りあるさからぶつきら棒にただ、「佐々伸子と申します。——よろしく」と云つただけで坐つた。彼女はこれらの人々を前に置いて、自分は廣い深い人間の生活を知りたいのだ、死ぬまでに一つでも、よい小説が書きたいのだ、と告白する勇氣をとても持ち得なかつたのであつた。

親娘は、十二時少し前にホテルに歸つた。

伸子が湯上りの部屋着で、晝間買つて來た細工のよい銀製の封蠟道具をいぢくつてゐると——それは歐洲戰爭の第五年目で、毎日處に赤十字や戦地慰問のためのパザーがあつた。伸子はその一箇處で、古風なその道具を見つけてきたのであつた。——寢衣に更へた佐々が來て、

「明日の朝九時に佃君が來るから覚えておくれ」と云つた。

と云つた。

「佃さんて——今夜のP」

「うむ。——頼まれて來た南波ななばの甥のことがどうも氣になるがとて一人でもやつてゐられないから、あの人にちと手傳つて貰はうと思つてね」

佐々は大きめに云つた。

「あの男はこちらに大分永いらしいから、きつと何か手がかりを見つけてくれるだらう。案内、いやその人なら知つてゐるといふやうなことがないでもあるまい。……こんな人間のうちやうちやあるところで、何年も行方不明の男一人見つけようとするのは、何しろ一仕事だ！」

そして、
「早くお前もおやすみ」
彼はいかに活動の後の睡眠を愉しむ風でさつきと寢臺に入つた。

三

次の朝、伸子はいつもの通り元氣を恢復し、爽やかな氣分で目覺めた。寢室のカーテンはまだ閉ぢたままであつた。カーテンの僅かな隙間から、一本の震へる細い金線のやうな光線が薄暗い部屋に射しこみ、化粧臺の上の白粉壺に小さい燃える炬火のやうな閃きをつくつてゐる。

彼女は、靜かな氣持でかけものをはねのけて起き上つた。伸子は、首をのぼし、彼方の寢床を眺めた。父は先に起きてしまつたと見え、床は空であつた。

伸子は、枕許の時計を見た。九時半になつてゐる。彼女は、忽ち昨夜の約束を思ひ出した。――

彼女は、部屋着を羽織り、窓をあけた。今日もよい天氣だ。少し霞つばい空で、朝日が

暖かく十月下旬の街路や建物に輝いてゐる。伸子は、格別急ぎもせず顔を洗ひ、髪を結ひ、衣服を更へた。彼女は昨夜と同じ、白絹のカラアのついたさつきばりした紺の服で廣間へ下り行つた。

朝の廣間は澄んで清らかで、大理石の圓柱や熱帯植物の鉢植が、埃一つない空氣の中に納まつてゐる。

伸子は、人影疎らな廣間を見渡した。食堂の入口に近い長椅子に並んで、父と佃とが話してゐる。彼女はまつすくそつちへ行つた。

「やあ、起きたね」
彼女は父に朝の挨拶をした。そして、彼女のために、椅子を引きよせた佃に、

「ゆうべは失禮いたしました」
と云つた。

「私こそ失禮いたしました。お疲れになりましたらう」

佐々は佃とは、すぐ話を元に戻した。彼らは、南波武二を尋ねる廣告を日本字新聞に出すこと、佃が市の宿泊所の名簿を調べることなどを定めた。

傍で二人の話を聞きながら、伸子は佃がこへ來ても、昨夜彼女の目についた寒酸氣を顔や聲に持つてゐるのを感じた。その上かうやつて相對してゐると、彼には、彼女何處かに引きつけるやうなところがあつた。その引きつけられるやうに感じるものは何なのか。

外面的なものでないのは明かであつた。彼の服裝は、朝のはつきりした光の中で昨夜にまして氣が利いても見えなければ、上等でもなかつた。むしろ貧しげであつた。容貌にしろ、それは美しき男性といふ範疇から遠いどころではない、燈火の反映の下で見たより一層陰氣であつた。それなのに、何故か彼には伸子に好奇心を起させるものがあるのであつた。

――
話が一落すつくと、佐々は、
「どうです、一緒に茶でも上りませんか。――
――實は我々もこれから食事をやるつもりですから」

と佃を誘つた。

佃は、一旦辭退したがテーブルについた。

伸子は、彼から、日本から來た勞働者が浮浪者になる経路や賭博狂のある男の話などをきいた。佃は話下手であつた。自分から話題を展開させる性質の男でなかつた。彼は、教室に出る時間の都合があると云つて、間もなく中座して歸つた。

伸子は、十一時前に下街に行く父とホテルを出て、一緒に地下電車の停留場まで行つた。

そこで別れ、彼女は自分だけ、徒歩で美術館に行つた。

土曜、日曜以外館内はひつそりしてゐた。

右のとつつきに、ロダンの作品ばかり集めた一室があつた。レムブランドの「花を持てる女」の前で、イタリー人らしい一人の男がそ

れを模寫してゐた。彼は熱心に、美術家らしくブラウズを着た背をかがめ、原畫を自分の畫面とを見較べ、見較べ細心に、神祕的な原畫の素晴らしき色調を出さうと努めてゐるのだが、伸子の眼に彼のカンヴァスは醜怪以外何ものでもなく映つた。ある場所では雜誌の表紙にでも應用するのが、亞拉比亞人が槍を振つて躍り上る黒馬に跨つてゐる繪を、石版刷のやうにはつきり寫してゐる中年の女がある。伸子は、輕い晝飯を階下の喫茶店で少しあちこち歩き廻つた。

もう歸らうといふ時、彼女は急にあることを思ひつきもう一遍階上へ引きかへした。しばらく迷つたあげく、番人に訊き、伸子は、一つの人氣ない陳列室に入つた。そこは古代波斯の美術品や寫本などの陳列室なのであつた。

これまで、大ざつぱに土耳其系統の美術品として好んでゐた精緻な唐草模様の銀細工、絨氈、碧と黒との和藥の對照が比類なく美しい陶器などが、皆イラン人の製であつたのに伸子は驚いた。彼女は、特に、入つて突當りの廣い壁に懸つてゐる裝飾瓦に異常な饒しさと興味とを覺えた。貴人行樂の圖で、花の咲き満ちた春の樹下に若い貴族の男女が語つてゐ、侍女が彼方から裳を春風に吹かれながら酒瓶を捧げて来る樂しげな構圖だが、玉女の下振れた豊かな頬と云ひ、大どかな眉と云ひ、領巾をかついだ服の様子と云ひ、所謂天

平時代の風俗をつくりであつた。そればかりではない。一面に咲き亂れた花の愛らしき形から、樹木、飛んでゐる鳥の形、しかもそれらを彩るたつぶりした和藥の黃、紫、綠、碧の見覺えある配色に至るまで、寧樂朝の美術を回想させずには置かないものがある。

伸子は、體が熱くなるのを感じた。せはしく心の中で波斯、中國、日本と聯想が飛んだ。しかし、直ぐその三つの間に正しい連絡を見出さうとするに伸子の東洋美術史はあまり貧弱であつた。

彼女は、なほ當惑と物好きの現れた眼つきで、幾つものガラス棚の繪卷物を見た、纏布を卷いた、頭でつかちで眼ばかり大きな玉が輿にのつてゐるところや、狩獵の繪がある。餘白に記録らしい文字があつた。けれども、朱や金で裝飾された、模様のやうな文字は、繪がなければ伸子にはどつちが上か下かさへ見わけのつかないやうなものであつた。彼女はこつこつ美術館の數多い石段を降りながら、あんな文字を佃が本當に讀むのかしらと怪しみおどろいた。

土曜日に、伸子は父と朝から郊外の知人を訪問に出かけた。

三時過ぎに市中にかへつて来たが、佐々は夕刻まで下街で用事があると云ふので、伸子獨り先にホテルへ戻つた。昇降機の方へ行きかけると、誰かが彼女の名を呼んだ。振り返ると、素ばしこさうな、そばかす顔のベルボ

ーイが驅けて来て切口上で報告した。「お客様です。丁度今いらつしやつて彼方に待つていらつしやいます」

伸子は、誰だらうと思ひつゝ廣間に戻つた。見ると、昨日の朝と同じ食堂の入口に近い隅に、佃が來てゐる。彼の用向きは直ぐ察しられた。彼が、自分のところと定めたやうに一つの場所を占領してゐるのが、伸子に何となく彼の地道さを感じさせた。伸子はくつろいだ氣分で挨拶した。

「今日は――。父はまだ歸りませんが、私で分りますこと？」

伸子は彼と向つて座をしめた。

「きのふお頼みを受けた新聞廣告を出すやうにして來ましたから、その受取を差し上げようと思ひまして――」

「さう、どうも有難うございました」

伸子は渡された紙片を一寸見て手提の中にしまつた。佃はその手元を見守りながら云つた。それから――今朝ミルス・ホテル――お話した市營宿泊所ですが、あすこへも行つて見ましたが、近頃の帳面にその名は見當りませんでした。……三月分出して貰つてよく見たのですが」

「まあ、そんなにいちどきにして下さらないでもいいのに」

伸子は、彼がどうしてそんな時間を持つてゐるか驚いた。

「うちの父はああいふいそがしがりやだから、願ふ時は大急ぎにこたえたお願ひするけれども、貴方は、ゆつくり、お暇な時して下さればいいのよ」

「いいえ、かまひません。きのふは午後すつかり空いた日ですから——ではどうぞお父様がお歸りになりましたら、新聞にはたぶお父様後日廣告が出るとお話し下さい。——ミルスの方へは、また二三日うちに行つて見ませう。少し心當りもありますから……」

「どうぞよろしく」
——けれども、何となくこれきりで立ち上り、左様ならと云ふ氣がしなかつた——佃も、いそがないと見え、傍の小テーブルに置いた帽子や手袋をとりあげる風も見えない。伸子は、やがて、

「貴方のやつていらつしやるイラン語といふの——まるで不思議なものね。きのふメトロポリタンに行つたので覗いて見たけれども、私にはどつちが頭だか尻尾だかまるでわからなかつたわ」

と云つて笑つた。佃も頭を振つて笑つた。その笑顔は、静かな湖に漣が擴がつて行くやうであつた。彼は、

「どんなのを御覧になりましたか？ 巻物ですか、それとも石刷りですか」
と訊いた。

「ガラス棚に入つてゐる巻物——繪のある。——波斯人は今でもあんな字を使つてゐ

ますの？」

「——字は大して違ひますまい。言葉の方は昔から大分違つて来てゐますが——字でも、大昔はあんなのでない楔形文字を使つたのです——」

伸子は、興味にひかれて佃の顔を見た。

「そんな字で、どんなものを書いたんでせう。記録や何かばかり？」

「いいえ！」

佃は、力強く否定した。

「史詩や物語も澤山あります。——もつとも、ずつと昔、その楔形文字の時代は、王がほかの民族を征服した短い記録のやうなものが巖なんかに刻まれたものばかりですが——」

伸子は、話に身が入るにつれ、飾りつけなく、率直に口を利くやうになつた。

「字がだんだん複雑になり癒えるに従つて、種々な物語が書けて来たといふわけね。——どんな風な話が多いのでせう……どんな氣質が現れてゐる？ 書いたものに——」

「——さあ」

佃は考へて黙つた。そして、どしどし話さないで少し伸子をもどかしがらせたのちに云つた。

「——大體から云つて悲觀的でせうね」

「人間を悲觀してゐるの？——それとも時代の境遇を不平に思ふの？」

「あの國民は、昔から種々な民族にいちめられて来てゐますから、政治的に苦しんでゐる

のが多く原因してゐるでせう」

「——」

伸子は、彼の専門が學術上に持つ價值や、研究のめざしてゐる目的などを訊ねた。比較言語學は面白く彼女に思へた。民族の心理や社會組織、文明の消長と切つても切れな

い縁のある、活きた総合的な研究の一分野として興味をそそるものなのであつた。佃は決して迷惑ではないらしい様子で、丁寧に、しかし何處やら言葉足らずに伸子の訊くことを説明した。彼は小さい手帳を出し、現代文字の標本を書いて見せたりなどした。

彼らは、二時間近く話した。佃はやがて見舞ふ病人があるからと云つて立ち上つた。

「——日本人の方？」

「ええさうです。もう大分いいのですが、每週一遍づつ行つてやることにしてゐるので待つてゐるでせう」

丁度その頃、ほとんど世界ちゆうに瀰漫して悪性の感冒が流行してゐた。紐育市中でも毎日、夥しい患者が脳や心臓を胃されて死亡した。獨逸の潜航艇が、合衆國の沿岸へ来て病菌を撒いて行つたなどといふ評判さへあるのは、伸子も新聞で知つてゐた。

彼女は佃に笑ひながら云つた。

「お見舞ひはいいいけれど、ご自分で貰つていらつしやらないやうに」

すると、佃は案外眞面目に云つた。

「私はたぶん大丈夫でせう、三四ヶ月前に種

種な豫防注射をしましたから」

「まあ、どうして？」

「Y・M・C・Aの方から、佛蘭西へ行くことにしてすつかり準備した時させられたのです。チフスや猩紅熱の。——だからうつりませうまい」

彼は、重々しく云ひながら、テーブルの上から老書生らしい古くさい山高帽をとりあげた。

「それに、ああいふ病氣はこちらの心の持ちやうで運ひます」

どうして戯地へなど行く氣になつたのかと訊きたく思つた。伸子に何の説明も與へず、佃は丁寧に挨拶して、ぎこちない足どりで人ごみの間に隠れた。

伸子は部屋に歸つた。

閉め切つてあつた部屋には、午後の穏やかな斜光とともに、むつとするいきれがこもつてゐる。彼女は窓を廣くあけた。そして、帽子をとり、外套を脱ぎ、先づ一休みといふ心持で、長椅子の上に横たはつた。

彼女の両手は組合はされて頭の下にあつた。その下にクツションがかきなつて柔かく心持よく押しつけられてゐる。脇かけの部分が高いので、長椅子は彼女の眼のところ程よい陰翳を興へた。暖かい……室内は絶対に物音せず、わづかに、開いた窓から氣にならない程度に市街のどよめきが流れて来る……神經を撫で和らげられるので、伸子は眠いや

うになつた。けれども、彼女は寝入りはしない。うつとりした眼をあげ、閃きのない老いた午後の日光の遊んでゐる白い天井や小枝模様の濼い壁紙の上を眺める——考へる。なぜなら伸子の心から、佃の古くさい黒い山高帽がまだ消えてゐない。……

佃に會ひ、彼と話すのは、伸子にとつて興味でないことではなかつた。旅行に出てから、彼女はそんな種類の話をする機會もあひても、佃に會ふまでは持たなかつた。佃の専門の研究について種々新しい話を聞くのは面白いのだが——伸子は考へた。彼はなぜあゝ特別な印象をひとに與へるのであらう。彼は、まるで流行に反抗でもするやうに、猶太人の爺がかぶりさうな古びた山高帽を放さない。その山高のやうな特別さ、淋しいやうな満ち足りてゐないやうな何か伸子の心をひくのであつた。彼がもう若くないのに貧乏しつつかのやうな研究をしてゐるらしいのが同情を誘ふのであらうか。或は、自分が生活力の充實を感じて活活した女だから、逆に暗い彼の存在に興味を覺えるだけなのであらうか。——伸子は、くるりと長椅子の上で腹這ひになり考へつづけた。

二三日おいて、佃は職業紹介所を調べた報告をもたらし來た。

南波武二の消息は何處でも得られなかつ

た。佐々は、更に佃の友人を頼つて、中部の主な都會から發行される日本字新聞に同じやうな廣告を出すことを頼んだ。佃は、壓、その打ち合せにホテルへ出入した。また、伸子がふと話したC大學の講義目録を持つて來て貸したりした。

佃がその印刷物を持つて訪ねて來た晩、伸子は父と、客があつて階下の廣間にゐた。伸子は父達の會話を一向楽しんでゐなかつた。

老人は父達の會話を一向楽しんでゐなかつた。老人のその容は、伸子がまだ十ぐらゐの女の子でもあるかのやうに時々じろぢろ永いあひだ顔を見ながら、口ではまるで彼女と無關係な、鐵の話をつづけた。——ところへ外套を腕にかけ、帽子を手に持ち、陰氣な顔つきで廣間のはじめに佃が現れた。彼女は、活々彼を迎へた。佐々は、佃と東郷といふその老人の客を紹介した。佐々は、持ち前の愛想よさで、しきりに客同士共通な話題を提供しようとした。佃も、丁寧な態度と言葉で佐々からの話、東郷のやや親父ぶつた質問に答へた。が、伸子には佃がちつともしんから愉快にその會話をしてゐるのではないことがはつきり感じられた。彼が、社交上の義務といふ風で應對してゐることが、伸子に不満であつた。だんだんその無言の壓迫が堪へられなくなつて來た。彼女は、佃の態度に拘泥する必要が自分にあるのかわからないのかを顧みる暇なく、自分の場所から立ち上つた。そして、父と東郷に、